

2020年度しあわせ研究

JSL 児童への日本語支援における
テキストマイニングの可能性

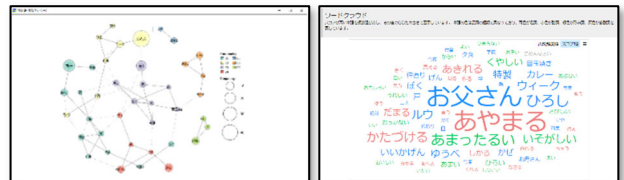
研究員 村澤慶昭



外国につながるのある日本語の支援が必要な児童・生徒（以下 JSL 児童・生徒）に対する活動は、各地で様々に行われてきていますが、コロナ禍において、生活の問題やデジタル機器・環境の格差問題などが顕在化しています。一方、急速にその必要性から進展をみせたオンライン授業やツールの浸透は、文部科学省が進める「GIGA スクール構想」を加速させる要因となっています。各教科においては、デジタル教科書の開発や導入が進められています。では、このような状況は、JSL 児童・生徒にとっても朗報となるものでしょうか。一部出版社で試験的に作成されているマルチリンガル教科書は、従来の支援・指導の形を変えていくものと期待されています。このように、技術の革新、ICT 環境整備が急速に進む中で、新たな支援や指導体制の構築のための各教科の教材のデータベース化やその分析、活用の重要性が増しています。

20年度は、しあわせ研究所の研究費の助成を受け、「外国につながる子どもたちは幸せか」「子どもたちを取り巻く人々は幸せか」という問いを念頭に、江東区の公立小学校

での支援に資する新たな教材開発を目指した国語科の教科書のデータベース化、分析を進めました。既に東洋大学の田中祐輔氏による出版5社の国語科の教科書のデータベースがCOSMOS(<https://cosmos.education/>)で公開され、現場での活用も始まっています。データベース化されたテキストからは、語彙の抽出などが容易となり、特徴が明示されることにより、新たな支援・指導の可能性が示唆されています。例えば、テキストマイニングの手法は、AIによる形態素分析が飛躍的に進んできたことから、だれでも手軽に行える時代になりました。文章を読む・理解する過程で重要な文字情報の認知の際、「外国語」である日本語の文章を見ただけで萎縮してしまう子どもたちに、ことばが視覚的に出てくるような仕掛けを用いることで、語彙そのものの把握だけでなく語彙間の関係把握や文章中での位置づけの理解を促すなど、従来の学習とは違ったアプローチの可能性も出てきました。今後も、支援・指導者側だけでなく、子どもたちの主体的な学びにおけるこのような手法の活用の検討を重ね実用化を目指します。



分析例：重松清「カレーライス」（光村図書：国語五）

左：KH Coder (<https://kncoder.net/>)

右：ユーザーローカルテキストマイニングツール

(<https://textmining.userlocal.jp/>)